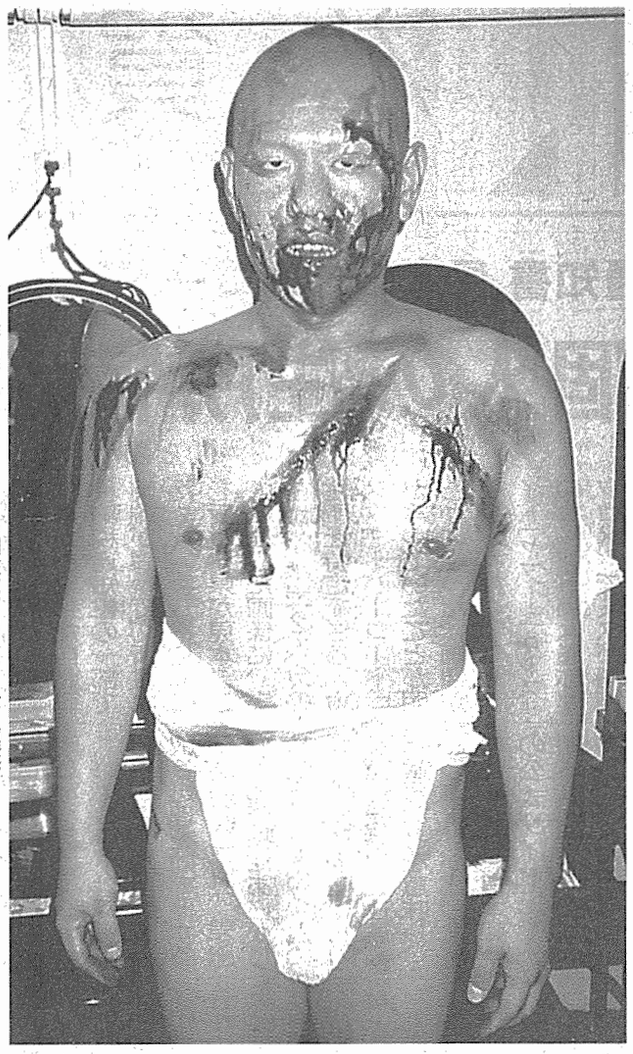
凶悪な形相で赤ちゃん言葉

監督絶賛のよだれ自作

大部屋出身の俳優 土平ドンペイさん(52)＝草津市⑲

はい上がる人 わたしの歩跡



どの作品でもキャラクターの個性はピカイチ＝本人提供

三池崇史監督

三池崇史監督のオーディションから数日後でした。大部屋の女性社長に呼び出され、「出てくれって言うてはるわ。勝手にオーディション受けてどうすんの？」と詰問されたんで、「すみません。それだけはやらしてください」ってお願いしたんです。

Vシネマ「第三の極道」（1995年）という作品です。震災の後で半壊したビルの中で犬のように飼われている役でした。僕の強烈なキャラを生かそうと三池監督が思ったらしく、3人のチンピラのうち、1人だけ全然違う役柄にしたようです。

「よだれを垂らしている」と台本にあり、よだれがポイントやなあって。家帰ったら一番下の子（次男）がハイハイして、にたーと笑うのを見て、これぞよだれや。自分でも洗面所で流してみたんですけど、大人はスーッと垂れて、映像になっても面白ないなあ。なんかないかなあ。スーパーうろうろして、その頃出始めたコーヒーシロップを見つけて、原液はちょっとどろすぎるな。水で薄めてやったら、赤ちゃんと同じよだれが出た。これや。現場でタラ～ッと垂らしたら、三池監督が喜んで「寄りも撮らせてください」。

敵対する組の中条きよしさんが主役で、その彼女を、高らかな声を上げて追っかけ回すんです。ビルの屋上まで追い詰めて、女性が飛び降りようとするときに初めてのセリフがあって、「僕、死体でも好きでしゅ」って言うんです。死んだ後でも暴行するぞという意味なんですけど。

どういう言い方をするのか、三池監督も楽しみにしてたんですけど、よだれは赤ちゃんで作ったんやから、言葉も赤ちゃんが面白いなと。怖い形相なのに、しゃべったら赤ちゃん。このシーンしかないのに、作品を見た大部屋の先輩方が「これは、土平ちゃんの映画やわ」って言ってくださって。

≪俳優としての足がかりをつかむまで、妻と約束した猶予期間はたった3年。すぐに2年が過ぎた≫

やばい、時間がない。最後の1年はツテがなくても、東京へ行こうと考えていたんです。京都のままで3年間終わったら、40、50歳になって1回でも東京に行けば良かったって後悔するのがものすごく嫌で。そうや、三池さんに電話しよう。Vシネマのときの制作会社がこんな名前やったなあ。電話番号案内の104で調べて電話したんですよ。「三池監督おられますか」「少々お待ちください」。作品があるときしかそこにはおられないのに偶然出てくれはった。

「第三の極道をやった京都の土平です」って言うたら、「土平さん、どうしてるんですか、東京出た方がいいですよ」。「正直、すごい悩んでいるんです。何のツテもないんで協力してもらえないでしょうか」「ちょうどよかった。明日から作品がイン（撮影開始）するんで、一つ役を作りますよ。来てもらったときに事務所の話もしましょうか」。その頃は、大部屋の女性社長から「あんたは勝手なことばかりする」とか、さんざん怒られていたときで「わかりました。行きます」って答えました。

【編集局・大澤重人】

＝つづく、水曜掲載

「役者さんの悲哀感じる」

ドンペイさんがフェイスブックで発信中。連載を読んだ方から「演者になるって最高に楽しいですよね！ 私も夢を見た一人です（笑）。一般の方はTVや映画や舞台で活躍されてる方のみが役者さんと思ってるでしょうね。影で頑張ってる方を含めると大変な数かと。表舞台に立たれてる役者さんの悲哀を含め、拝見させていただいてます。更なる高みを目指してくださいね」というコメントが寄せられました。